

針葉樹会報

1994. 5. 第80号

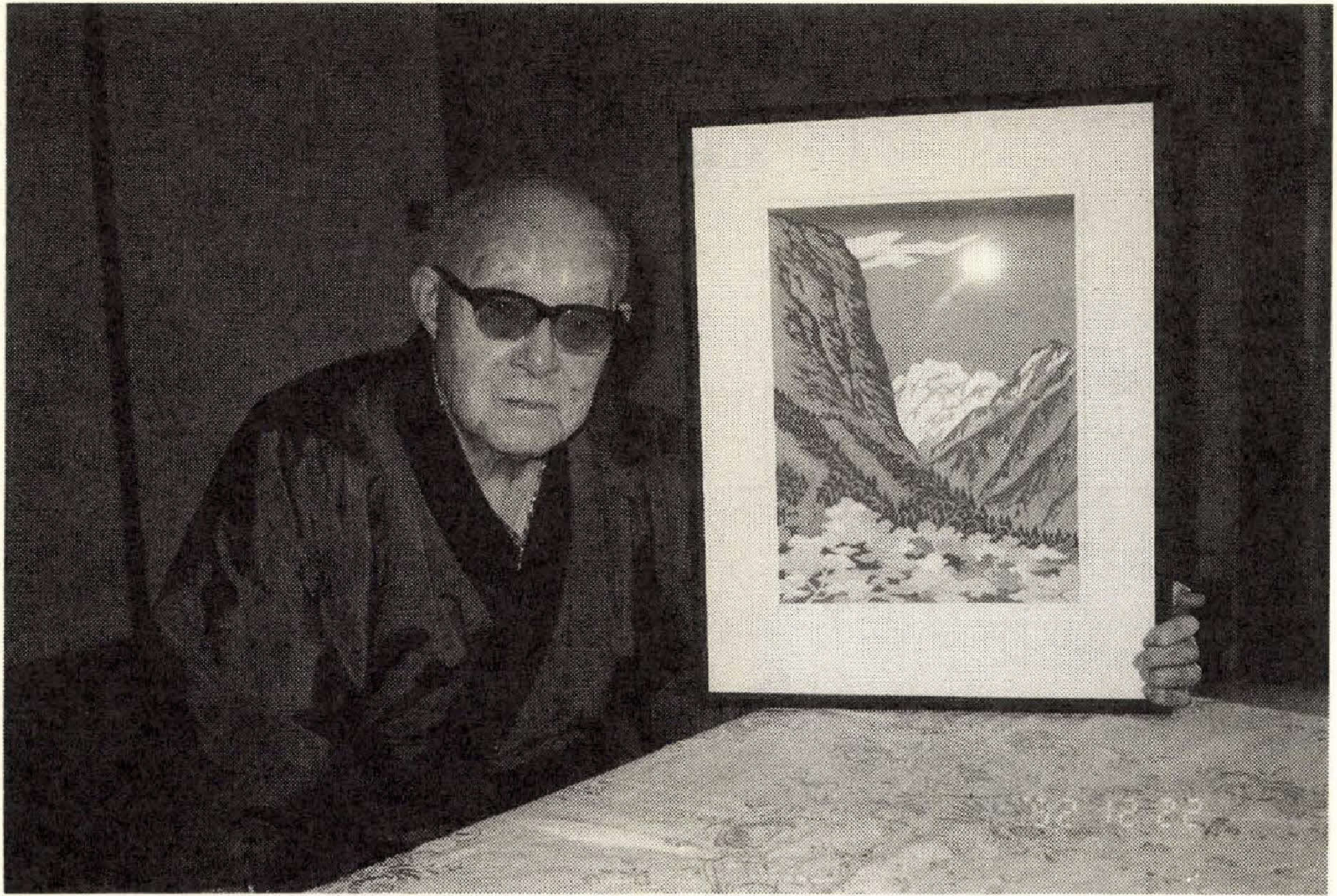
近藤恒雄氏
追悼号





近 藤 恒 雄 氏

(1902~1993)

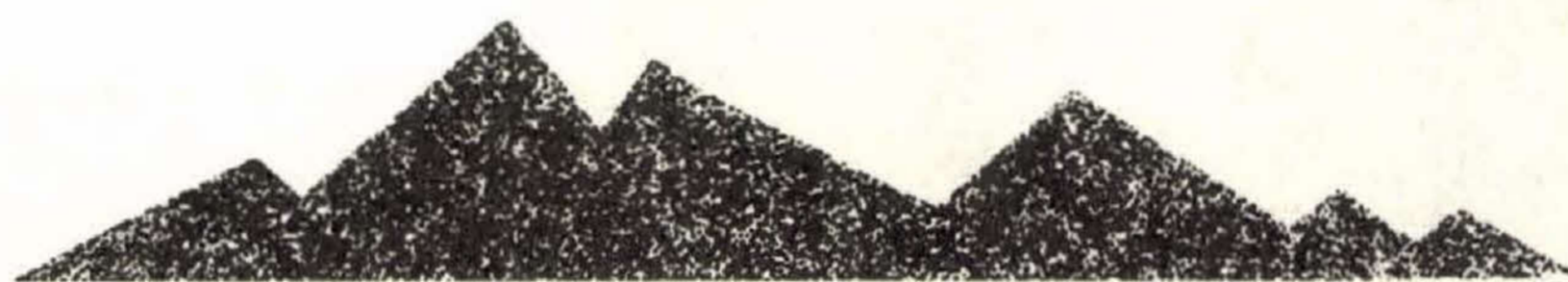


針葉樹会から贈呈した喜寿記念品（JAC会員鈴木正俊氏の作品）
を手にして喜ばれている近藤さん
（平成4年12月22日 大磯の自宅で 岩崎利一君写）



日本山岳会有志のあるパーティで談笑されている相手は吉沢一郎さん
（昭和46年12月14日 霞ヶ関三井クラブに於て）

発行日 1994年4月1日	針葉樹会報 第80号	編集人
発行所 針葉樹会		〒167
印刷所 篠田印刷		東京都杉並区南荻窪3-29-23 稲毛 尚之



針葉樹会報 第80号

目 次

近ちゃん(近藤恒雄君)の急逝は晴天の霹靂.....	吉澤 一郎	1
近ちゃんのこと.....	堀岡 清	4
近藤さんを吉沢(松)さん.....	柿原 謙一	5
近藤さんを偲ぶ.....	岩崎 利一	6
近藤さんの思い出.....	望月 達夫	6
近藤さんのこと.....	山本健一郎	8
遺稿.....	近藤 恒雄	10
広島に村上君(昭三十九年卒)を訪ねて.....	名和 泰三	11
季懇親山行報告(奥多摩・川乗山).....	兵頭 元史	12
会務報告.....		13
編集後記.....		13

表紙写真説明 鳳凰三山(地藏岳付近)から見た白根三山

近ちゃん(近藤恒雄君)の急逝は晴天の霹靂

吉澤一郎

実を言うと、私が先に死んだら、コンちゃんに、弔辞ではなく祝辞を述べて貰うように予定していたのである。

ところが、二、三日(当時)の電話連絡で、われらの近ちゃんの急逝を知ることになってしまった。全く晴天の霹靂というのは、こういうことを言うのであろう。

一橋大学の山岳部は、(関東大震災の前年、大正十一年(一九二二)に創立されたものだが、その時の入部者の数は二十名を越えていたと思う。

コンちゃんの入部は一年遅れたが、ペンちゃん(村尾近二君)と私は、創立時からの部員であった。

長い間、人の十倍以上も厳しい存在であったコンちゃんが、ある日突如として、幽明境を異にしてしまったのだから、世間には可なり多くの人が、ホッと胸撫で下ろしたことであろう。

本当に近ちゃんは、珍しい位に頑固一徹で、自説の最善を、常に確信し乍ら、世の中を押し通してしまっただから、ある意味では、幸福な人生ではなかったらうか。

それから、あんな難しい御主人に、長い間附合って来られた、温和な奥様の、内助の功も、忘れては罰が当たる。親友の一人として心から御礼申し上げる。

近ちゃんと私との関係は、極端に言えば、山以外には何も無かった。私には酒が合わないせいか、それが呑めない。従って人付き合いは本当に悪い方だった。

海外の山や探検などを調べていると、案外忙しかった。会社の帰りに縄のれんを掻き分け、酒を呑みながら、他人の悪口や、月給の低さをボヤいているヒマはなかった。

山行に関する限り、近ちゃんは私の言うことを信用して、よく私と一緒に出かけられていた。

私も彼の言うことに逆らったことはない。いつも“そうだね、そうだね”と頷き乍ら、聞いていたので、喧嘩の起こりようがない。それが良かったのかも知れない。

それにしても、私を“近ちゃん”と呼んでくれ乍ら山へ一緒に行く仲間は、一橋にはもう一人もいなくなった。天命だと言えば寂しい限り、

年はとりたくないものである。

I'm disgusted so much with my own older age, which increases in inevitably by one year after passing every twelve months.

てなことになってしまふ。本当にウンザリ。最後に、近ちゃんとの山行において、最も懐かしい思い出のあるもの三つを簡単に書いておく。

第一は大正一五年、昭和元年(一九二六)に、近、ペンと私の三人でやった、奥秩父主脈の大縦走(十日間)。奥仙丈岳の鞍部でビバークした夜中に、私のやった立小便が忽ち霰に化けたこと。これは、気象学者に聴くと、愚にもつかぬ夢物語りではなく、理屈にも合っているとの事だった。金峰から下りて増富鉱泉に着いた時、近ちゃんから五円借りて?ペンと一の旅籠代にしたのだが、その五円札は近が、足の裏に貼りつけて運搬して来たものであった。そのあとの話は面白いが、余り長くなるので、やめておく。

第二は昭和十年(一九三五)。ペン、近を含む十一名で、十一月の末に、信州の白馬岳に、スキー登山をやったこと。無風、快晴のため、頂上で私が撮った写真(槍の連峰がすっかり、はっきりと写っていた)。あとでそれがアサヒカメラに堂々と出たこと。頂上小屋前での記念写真をみると、十一名のうち、今(平成六年)残っているのは、四名だけ、ということになっている。



初冬の白馬岳にて(昭和10年11月)——一行は商大山岳部O・B並びに現役(当時)——

吉沢筆者、松浦、近藤、村尾、松木、鷹野(中支にて戦死)、岩崎、小谷部、三井鑛山山岳部員、同、原の諸君

第三は、木曾の上松から、最も短い、その代り最も急なルートで、猛烈な吹雪の中を、木曾駒ヶ岳の最高峰に達し、要心のため連れてきたガイド(猟師)のお蔭で、危険ではあるが、中御所谷のルートを発見し、迷うことなく無事に赤穂(現在は駒ヶ根)へ下りた。同行は中川孫一氏(一橋大学山岳部の創立者の一人)とコンちゃん私。

さて、バタン・キューという俗語がある。人間最後の時は、バタンと倒れ、キューッといって、その儘、逝ってしまうという意味である。

事故死は除くが、この型なら人に迷惑をかけることも、ずっと少なくて済む。

近ちゃんのはこれに近い最後であった。但し自信過剰は駄目。トシには勝てないという自覚は是非持っていて欲しい。

近ちゃんは最近まで、大磯の家の裏側にある約二百メートルの高麗山(コマヤマ)に毎朝散歩の積りで登っていたらしい。酒の好きな人は一層の注意が必要である。私はいいつも、停年前に死にたい人は、幾らでもお酒をお飲みなさいと言っている。しかし言うことはなかなか聞かないものである。

近藤君は、私を前出の通り一っちゃんと呼んでくれていた最後の一人であった。私の方が先に遠慮するだろう、と思っていたのに。こうなったら仕方がない。今はただ、君の冥土への旅の、平穩無事を祈るのみ。

近ちゃんのいじり

堀岡 清

私が山岳部に入れて貰ったのは予科二年になってからである。予科一年終了の春休みに帰道せずに、野沢で行われたシュナイダーのスキー講習会に参加した。泊まった酒屋で同じ講習会に

参加された奥野大先輩と商大生だということと同室にされた。小樽育ちで多少スキーが滑れたので山岳部入部を強く薦められ夏の上高地キャンプに参加した。

私は当時陸上競技部に属していたのでその合宿が終ってからなので、初心者に参加する所謂縦走が済んで古い部員が上高地に集ったそのベースキャンピングに直接入った訳である。そしてその時穂高を一通り連れて行って貰った。一橋山岳部が西穂をやったのは創部以来この年が初めてだったとのことで針葉樹会例会で「今年は優曇華の花盛り。南瓜の当り年」と言われたそうだ。新しく入部した初心者が上級生(磯野さん外)に連れられてたといっても創部以来初めてのコースをブレーキにもならず歩いたのだからそう言われるのも無理もない。これが近ちゃんの発言だったのではないかと後で思った。この時奥又白へ入る浦松佐美太郎氏が中山彦一を連れて徳沢に泊まっていたので、そこへも連れて行って貰い、シエンクのピッケルの買入れにも加えて貰った。

それからは月一回の針葉樹会の例会に出席するのが、石神井から東京へ出る嬉しさもあり全く楽しみであった。特別の話のある訳でもなく雑談が主の会であったが却ってそれが楽しく面白かった。熊さん、近ちゃん、ペンちゃん又孫さん等大先輩と親しくなれたのはその為である。札幌在勤の奥野さんとは帰道した際道内の

近藤さんと吉沢(松)さん

柿原 謙一

山行きにご一緒したが、近ちゃんとは記憶に残る様な山行きはない。私達が現役の時に部室に、近ちゃん愛用のものだったというガニーバックで造ったようなヤッケ代りのものがあったと記憶している。私は昭和十年卒業後直ちに門司へ赴任十六年迄居ったが、その間に大牟田在勤であった近ちゃんの所へ二、三回伺ったし又大磯へ御移りになってからも伺ったことがあり何かと御親しくして頂いた。

あの大らかな明るい感じ、太り気味の丸顔、丸い目の笑顔は忘れることの出来ない人の一人である。

石原脩さんからの書翰によって、近藤恒雄さんにつづいて、吉沢松次郎さんと金田近二さんの御逝去を知り、痛恨した。針葉樹会報をひもとくと、在りし日のことが偲ばれる。

一九三六年一〇月の奥秩父行は、孫さんの「国師岳迷路行」に詳述されているが、近藤さんのお姿があざやかに書いており、私には忘れられない山行である。

既に亡き村尾金二さんと近藤さんの友情は、後輩の私に、なんとも評しがたい深みを感じさせてくれた。一九三八年一月近藤さんは大牟田市へ赴任されるが、「近ちゃんを送る言葉 P EN」は、しばし近藤さんと会えなくなる村尾さんの、懇々としてつきない友情を、軽妙な言葉づかいで書いてある。「近ちゃんが遠い所に行く。昔ならば太宰府の向うと云う所だ。関君のロンドンや河相君のメルボルンに次いで遠い所だ。」と筆を起し、末尾に「一、汝針葉樹会費を忘るるこれ勿れ。」にはじまる「近ちゃんを送る言葉」十誠を餞とした。

大牟田に赴任された近藤さんは、夜間一升瓶を手許において、社員の方々と論談された由で、これは近藤さんから直接聞かされた私の記憶である。まさに面目躍如。

NHK放送局員であった吉沢松二郎さんは、村尾さんによく似た温厚な人柄であった。

一九三六年の一二月に銀座の公衆で、針葉樹会忘年会が催された。会員は孫さんはじめ一名、学生七名だったが、近藤さんの「演説」、渡辺さんの「羅生門」、中川さんの「墓の油」等の余興があり、余興を聞いてのあとに迷歌三首があった。つぎのとおり。

孫さんはセメント捨てても食いつぶれ無し(スケ)

コンチャンは腹がふくれて酔然と仰向け乍ら陶然たり(読人不知)

迷歌をば作ろうと云へど吉沢の放送局は酔ひて酔はざり(読人不知)

(その他にも二、三迷歌があるが判読出来ないのは遺憾此上なし)(以上増山記)

まさに当夜の陶然たるありさまが判るが、これに誤植はないと思う。編輯の達人増山清太郎さんの校正をへている。だから迷歌ぞろいであり、第三首はどうも吉沢松次郎さんの当夜の風手を、私が書いたように記憶する。

一九三八年二月に田部重治さんの話をきく針葉樹会が、如水会館で開かれた。吉沢一郎・吉沢松次郎さんたちも出席された。同年八月私に赤紙がきたので、如水会館で歓送会を催して頂いた。会員一四名部員七名だったが、吉沢松次郎さんも出席してくださいました。これからしばらくは、私は針葉樹会とお別れすることとなる。

金田近二さんは、会の席でお顔に接した程度だった。謹んでこれで摺筆したい。

近藤さんを偲ぶ

岩崎 利一

近藤さんには、学生時代から可愛がって頂きました。あの頃のこと忘れられないのは、「国師迷路行」です。奥秩父の国師岳の稜線に出るのに手間どって、ピバークをする様になったのですが、そのときの近藤さんの藪てぎの力強さは大したものでした。

戦後も引続きお世話になり、眼鏡のお客様もよくご紹介頂きました。銀座の小さなバーに、時々連れて行って頂き、そこで山行の話がまとまって出かけたりましたことあります。このときは小林重吉さんが一緒でした。

大磯のお宅へ、村尾金二さんと一緒に、高麗山を越えて入ったのも楽しい思い出です。高麗山は廣重の版画にもなって居り、原生林に恵まれた美事な山です。見晴らしの良いお宅で、奥様のお手料理をご馳走になりました。この高麗山を近藤さんは非常に愛されて、頂上に村尾さんの没後そのモニュメントをまつり、雨の日を除く毎日清掃を怠らなかつたのです。

手帳に高麗山詣での記録を克明につけて居られ、延べ数千回であったと思います。針葉樹会の卒業御祝品を届けに、石原会長とこの大磯のお宅に伺うことになったのも、何かの因縁が感じられます。他事乍ら、高麗山の麓の高麗寺住職（当時）が尾崎迷堂師で、私の亡父と親交のあった俳人だったのも、まことに奇縁でした。ご生前の、この上なくやさしい温容を想起しつつ、心からの感謝をこめて近藤恒雄先輩のご冥福をお祈り致します。

近藤さんの思い出

望月 達夫

近藤恒雄さん（コンちゃんと呼ばせて頂く）の無二の親友だった村尾金二さん（ペンちゃん）の没後、針葉樹会員のなかでは私などが山へ同行した回数が多いほうかも知れない。昭和七年頃からのお付き合いで、生涯に五十回近く一緒にした。数のうえではペンちゃんが一番多く、戦後だけでも百回に達した。百回記念にお二人でなにかおやりになったと記憶するが、ペンちゃんが亡くなったのは、それから間もなくだったように覚えている。

戦争が烈しくなる迄は、吉沢一郎さん（クマさん）、ペンちゃん、コンちゃんのトリオでよく山へ出かけていた。学生時代から私などが時々、その仲間に入れて頂いていたのは、思えば仕合わせだったと云えよう。

コンちゃんとの半世紀を超える時折の山歩きや、それにまつわるエピソードをいちいち書く紙幅もないし、思い出に残る山旅については、既に何篇か書いたこともあるので、ここにはコンちゃんと私との最晩年の山のことを書いて、コンちゃんを偲びたいと思う。

戦後初めてコンちゃんと同行したのは、たしか昭和三十八年秋の和名倉山で、藤島敏男さん（不二さん）とペンちゃんとの四人だったが、その頃はよく深田久弥、川喜田壮太郎（加和さん）、川崎精雄、佐藤久一郎、等の山に年季の入ったよい仲間ができて一緒にした。

そのうち久弥さん、加和さん、ペンちゃん、不二さん、久ちゃんなどが順次鬼籍に入られ、周辺が次第に淋しくなった。殊に昭和五十年九月のペンちゃんの長逝は、コンちゃんにとって非常に大きいショックであり、胸中の寂寥感には到底堪え忍びえないほどであったと想像する。それから後は私がよく同行した若い仲間の山行に誘ったり、たまに行われた針葉樹会の懇親山行に行かれたり、コンちゃん自身も会員だった一水会（旧通産省関係者の山の会）の山行に参加されたりしたようだ。

私の思い出に残る晩年の山旅は、牧野衛さんにご案内をうけて奥三河の低い山へ何度か出かけたことである。その最初が昭和五十七年十一月中旬の望月峠、神野山（△九三八）、茶臼山（△一四一五―愛知県最高峰）で清学山荘という特色ある民宿にコンちゃんを案内した。この山荘は東栄町三ツ瀬にあるが、牧野さんと私が前年四月（三ツ瀬）明神山（△一〇一六）に登ろうとして一泊したところ、すっかり二人を魅了し、昭和五十七年二月にも泊り、秋になったら私は是非コンちゃんを誘いたいと思ったところだった。果たしてコンちゃんは、その古い建物の造りや雰囲気満足した。

その二日目には大鈴山（△一〇二二）、（平山）明神山（・九四〇）に登ったが、途中では水野公男さん携行のニメートルザイルを二、三度も使うほどに岩場の上下が多かった。

当時コンちゃんは八十歳なので慎重を期した訳だが、道の分かりにくい尾根を長時間よく頑張られた。同行者は牧野さんが東道役で水野さんと中山啓司君が車をもって参加、坂本圭さんと私との六人だった。

この山旅が大いにコンちゃんの気に入ったので、翌昭和五十八年一月中旬にも牧野さんの計画で奥三河の低山を目指した。宇連山（△九二九、鞍掛山（△八八三）、岩古谷山（・八一六）に登ったが、中山君がまた車をもって参加、コンちゃんの他に柿原謙一さんと神戸恵子さん

（当時JAC会員）と私との六名だった。この時は山の位置の関係で清学山荘ではなく海老の古い旅籠、高島屋に一泊した。

更に同年十一月十二、十三日の奥三河は段戸山（△一一五二）と出来山（△一〇五二）で泊りは足助の北方、矢作川に近い小渡温泉を選んだ。これも牧野さんの計画されたもので、水野さん、山口亮さん、神戸さんと私に、中山君がまた車を動かしてくれた。段戸山は林道からの登り口が初め分かりにくく、また出来山は一等点だったが、段戸山塊では名の知られた寧比曾岳（△一一二二）は時間がなくて次回にまわさざるをえなかった。足助へ車を走らせる途中の当貝津川の上流や、段戸トンネルを越えて大見川の源流から西北西へ下って行く過疎の村々のあたりで見た黄葉、紅葉の美しさ、それは黄昏の淡い光のなかで夢幻の美を奏でていたが、コンちゃんらと共に何度嘆息を發したことがあった。

翌五十九年一月は関東一帯が大雪の年で、勿論東京でも沢山降ったが、前からコンちゃんと話して石老山へ行くことになった。佐々木誠君と私との三人だったが、一緒に行くことになった横山厚夫さんと寺田政晴君は年齢の故もあって、ラッセルの役目をつとめて下さった。この時の紀行は横山さんの好著『一日の山・中央線私の山旅』にユーモアも混じえて、巧みに描かれているので、八十二歳のコンちゃんの強

さがよく分かる。奥三河の山ではないが挿入した次第だ。

同年十一月二十三日〜二十五日の奥三河は清学山荘に二泊して、前に残り残した寧比曾岳とすぐ近くの筈ヶ岳（△九八五）に登り、二日目は曇って小雨も降るような天気なので、なるべく簡単なところを狙い津具村の方へ行って白鳥山（・九六八）、大峠（△九五四）に登り、以前訪れたことのある望月峠の入口を通過して戻った。三日目は幸い快晴で寒狭山（△九四五）に着いたのはまだ十時半過ぎ、途中からは好晴に恵まれて奥三河の多くの山々が見えコンちゃんは大変喜んだ。時間はまだ充分あったが、明朝は早くから用事のあるというコンちゃんのため、ここから帰路につくこととなった。しかし、小春日和のこの日は光線が美しく、風光は目を見はる程で、奥三河の山河の最も美しく、また最も落ちついた色彩の時季であり、牧野さんは屢々この時季を狙って案内されたのだった。しかも大気は澄んでいたので遠望もきいて、南アルプス南部の高い山々も時には見えたのである。この時の同行者は牧野、水野、神戸さん、私で、中山君は所用のため、その大型車を水野さんが運転してくださった。

昭和六十年十一月二十三、四日の奥三河が結局最後になった。牧野さんの他に水野さんが車を動かしコンちゃん、高木茂子君、私に加わった。初日に岩岳山（・一〇五〇）、仏庫裡（△

一〇七二)に登って清学山荘に泊り、二日目は雨で時々小止みとはなったが、寒狭山西峰(一〇〇一)へ登った。コンちゃんは八十三歳、牧野さんにしても七十九歳という高齢で、流石にお二人とも到底常人では考えられない強さと頑張りとおもちで、何といっても山での経験がモノを云った。二日目は雨のため直ぐ後を登った私は、コンちゃんの足許を見つめて気が許せなかったが、初日の岩岳山は晴間の多い温かい日で、山頂はちょっとした露岩なので、そこを攀じて終ると云った奥三河では面白い山だった。仏庫裡は山頂三角点のごく近く迄達しながら、前に来たことのある牧野、水野両氏も同じ様な地形のため探しあぐねて、コンちゃんのもう下ろうよという声のため今回は三角点を確認し得なかった。

コンちゃんとの奥三河の山旅は、以上で終わったが、すべて牧野さんが計画して下さったもので、それにはコンちゃんも大いに感謝していた。また奥三河の山旅ばかりでなく、コンちゃんとの山行はその後、特に理由があった訳ではないが、これが最後になった。

コンちゃんは昭和四年の卒業だから、山登りを始めたのは大正時代の末葉からである。山岳部時代の足跡は『針葉樹』の初期の何冊かを見れば分かるが、それからあの方がおそろしく長い。戦争中と戦争後暫く社務が超繁忙を極めた期間を除いて、亡くなる前年ぐらまで実に

長い年月、山を登られた。本当に山登りが好きだったのである。同じ山にも何度も登ったようだが、登った山の数をかぞえるのに苦労するのであろう。

いつであったか、かなり高齢になられてから、どこかの山の途中で、「少し荷物を持ちましようか」と云ったら、「自分の荷が自分で担げなくなったら俺は山を止めるよ」と云われたこともある。コンちゃんはそれだけ強健で頑丈であったが、それは特に大磯に居を定められてから、天気さえよければ毎日一時間ぐらい裏の高麗山を歩かれた。その数は何千回に及んだと聞くが、その努力が足腰をきたえるのに役立ったのであろう。

コンちゃんは針葉樹会、一橋山岳部に対し終生限らない愛情を注がれた。会にとつては文字通り、かけがえのない先輩であった。そして若い部員たちまで可愛がった。昔、私などがまだ学生の頃、小谷部や小林たち数名で時々松原のお宅でスキ焼きのご馳走になった。それは今でも忘れられない思い出である。後年には、不二さん没後紀子夫人の意気銷沈さを見るに見かね、親しかった山仲間とその夫人もまじえ数名で毎月一回(後年は二月に一回)昼食会を開いてお喋りをしあった。これは十年近くも続いたように思うが、大変楽しい集りだった。コンちゃんは細かいところによく気のつく人でもあった。コンちゃんの経済界での活躍について私には

述べる材料が乏しいが、三井鉦山の社員から三井化学工業(現三井東圧化学)の副社長にまでなったことを云えば充分であろう。

詳しいことを伺った訳ではないから、私の想像が半ば入っているが、コンちゃんはそれ程長く床につくことなく、昨平成五年六月に九十歳余の高齢で亡くなった。これをしも大往生をとげたと云わずして何と云おうか。半世紀以上の長い年月、公私に亘り限りないご恩を受けた私にとって、コンちゃんの遠逝は深い哀惜の情に包まれると同時に、正に立派な人生であったと仰ぎ見る思いである。

(一九九四年一月)

近藤さんのこと

山本 健一郎

私が近藤さんにはじめてお眼にかかったのは、昭和三十二年六月如水会館での針葉樹会の席上であったと記憶している。四月入学と同時に山岳部員となり、歓迎登山、谷川合宿に参加したあと、O・Bの皆さんにご挨拶するため、新入部員一同石原リーダーにつれられて如水会館へ出向いた次第だったが、近藤さんはあの気取ら

ない口調で、俺の息子も今年一橋に入ったが、軟弱で山へも登らず女の子の写真撮っているとおっしゃった。早速クラスの写真部の友人にきくと、ご子息の隆雄君は確かに写真部に在籍していて、親父さんそっくりの顔をしていたが、決してそんな軟弱な人物ではないと隆雄君の名誉のために申し上げておこう。彼は現在東レの監査役をしている。

それに、実は私の父も大正十四年の専門部の卒業だから、学部の昭三組とは、同じ年に入学したので、初対面のときから大変親しみを感じていたが、社会人となってからも、同じビルに勤務する機会もあり、近藤さんの色々なご発言をきいていると、筋のおつたご意見を極めてはっきりと当然のこととおっしゃられ、頭の下るおもいをしたものである。

ある年の針葉樹会で会計報告がされ、会費の納入率が低いことが報告されたとき、近藤さんは、こういう会は、会費が納入されなければ成り立たない。会費をきちんとかつめないと、きちんとかつめないと、会費が居ることがおかしい。俺が会計をやればこんなことにはならないと、ご自身で会計をかって出そうな勢いであった。大先輩に会計をお願いする訳にはいかず、今後はきびしく運営をしますということでお許しいただいたが、どんな僅かなことでもゆるがせにせず、義務を果たしてから権利を享受せよと、社会人として大先輩からお教えをうけた様に思

い、この日のことを憶い出す。

それからしばらくして、不況の中三井化学は六百人にもものぼる人員整理をせざるを得なくなり、副社長のポストに居られた近藤さんは、きびしい顔で三井本館の中を歩いておられた。そして、整理がすんだあと、あっさりと三井化学を退職されてしまった。その間どういう事情があったか、私がかうかがい知る由もないが、近藤さんのご性格からして大勢の従業員を辞めさせて、会社に残る訳には行かないと腹をきめて居られたのではないかと、その引き際のあざやかさに感心するばかりであった。

皆さんご承知のように、サラグラール遠征の時にも近藤さんはご自分の哲学から、企業からの募金にたよる安易な資金調達をいましめられ、O・Bの手で資金調達をとの呼びかけを先頭に立って下さった。これも安易に企業からの募金に全面的に依存しようという、虫の良い考えでいた私には、大変きびしい教訓であったように思う。

それにしても残念だったのは、私がシンガポールに勤務していた時、東レの香港現法にいた隆雄君から、近藤さんご夫妻が香港とシンガポールを旅行される計画なので、シンガポールでは宜しくとの連絡を受けたので、喜んでお待ちしていたのに体調を崩されたとかでこの旅行は中止になってしまった。もしこの旅行が実現していたならば、大歓迎をしてサラグラール遠征の

ときのご恩返しをすこしはすることができたのではないかと思うと、惜しい機会をのがしてしまったとくやまれる。

こうやって近藤さんのことを書いてみると山ではなくて下界での事ばかりとなってしまう。これは、幸いに同じビルに勤務していたこともあって、社会人としても色々お教えいただく機会があったためだろう。

きっと近藤さんは大親友村尾さんとの再会をはたして、お二人で仲良くお酒をくみ交わし、山登りをされているにちがいない。



遺稿

近藤恒雄氏の最晩年の紀行文で針葉樹会報に未発表のもので、ご遺族の方の格別の配慮で今回掲載させて頂くことになりました。

一、針葉樹会宛原稿

針葉樹会にはすっかり御無沙汰しておりましたが幹事より何か投稿せよとの事ですので一筆書きました。

老生も今年満八十九歳となり人生の終点近くとなりましたが本年も春から何回か山へ参りしました。今記録を見ますと七回位出掛けて居ります。そのうち蔵王方面へ二月一日より三日間行って来ました。参加者は皆んなスキー組ですが私の外二人で歩いて雪の中を登りました。

丁度天気が良かったのでロープウェイを利用して当日宿泊所の片貝沼畔の山荘に至り当夜ここで宿をとり翌日ザンゲ坂上のロープウェイ終点まで登り、それから雪中を登り、約二時間で三宝荒神山と地蔵岳の間の鞍部にある地蔵尊の前まで登りましたが吹雪が強く前後の登りが不

明になった為、引き返して蔵王ロープウェイを利用して下りました。当日は片貝沼畔の山荘に泊り三日目に蔵王温泉経由バスを利用して山形駅経由で帰京しました。

五月二十五、六日の二日で水戸駅経由西金地方の湯沢温泉より山へ登りました。丁度、昔袋田温泉から山越しに、この湯沢温泉に来た事がありますのでその時は村尾、藤島、深田の諸兄と一緒にした。何んだか懐かしい思い出に浸りました。今度は袋田温泉の方向に行かず湯沢温泉から真北へ伸びる山道を北へ登り、約三時間位で大変景色の良い処へ出てそこで若い人が昼食を料理してくれ、大変ご馳走になり勿論盃をあげて良い気持ちで西金駅経由上野に帰って来ました。他にも日帰りの山旅もありましたが老人向のものばかりです。

何時迄山へ行けるか分かりませんが体が駄目になるまで続けるつもりです。又近々お目に掛かれる会の時迄楽しみにして居ります。

二、小樽山と乙女高原行

平成二年八月四、五日古い故人の長男と云っても早や五十歳を越した山の友人と外数人で中央線塩山駅からバスで塩平迄行き焼山峠まで乗り継いで行き、そこから山道を登り、一杯水と

云う処で山の水で喉を潤し、更に登り続けて間もなく小樽山の頂上に到着。そこで約三十分位の昼食を終えて往路を下り再び焼山峠に出た。

午後四時であった。そこから山道を下り終り、五十分で金峯泉の古い温泉の前を通り小さな公会堂の前に出た。ここから琴川の溪流に出て、公会堂の主人の好意で自家用車に乗せて貰い、金峰牧場の柳平で下車しここで初日宿泊した。

ここから昔若い時分細い踏み跡を辿り、剣ヶ峯の西側を辿りその日は尾根の途中で夜営し、翌朝早くそこから奥千丈岳に出て、更に石塔尾根の上を左に曲り大峠に出て下った記憶があり懐かしい処であった。

翌日、柳平の金峰山荘を出て、車で昨日通過した焼山峠から乙女高原に出て、公会堂の前から山道を南下し標高一六八〇米突の低い山頂に出た。ここは又風景が良く、富士山がポツカリ顔を出しており、頗る快適な気分を味わい、再び乙女高原公会堂前に出て小休止後細い山道を南下し約一時間後に塩平街道に出て約三十分位で塩平のバス停留所に到着した。ここより塩山駅迄バスを利用し十二時四十五分塩山駅前で昼食を済ませ二時少し前発の立川行の列車に乗り、新宿経由で今回の山行を終了した。

近藤恒雄氏略歴

明治三十五（一九〇二）年七月十六日、札幌で生まれる。

大正十二（一九二三）年、東京商科大学（現一橋大学）予科入学。山岳部入部。

昭和四（一九二九）年、卒業。三井鉱山（株）へ入社。

昭和十三（一九三八）年一月、三井鉱山三池染料工業所へ転勤。大戦中米機の焼夷弾投下による火災にあたり手に酷い火傷を負う。戦後東京に復帰。後年三井化学工業（株）が三井鉱山より分離創立される際に化学工業へ転出。

昭和三十七（一九六二）年五月、三井化学工業（株）副社長就任（同四十一年六月退任）。

昭和四十一（一九六六）年四月頃、神奈川県大磯町の高麗山々裾に家を造り住む。

昭和四十四（一九六九）年三月から約十年間中部ケミカル（株）の代表取締役、取締役相談役、監査役、等を勤めた。

平成五（一九九三）年六月十三日午前〇時十分、急性呼吸不全のため大磯町の病院で逝去。

近藤氏は学生時代は勿論、針葉樹会員になってからも、実に長期間山登りを続けた。おそらく八十八、九歳迄しっかりした足どりで山登りができた稀有の人であったろう。

（早期の『針葉樹』及び針葉樹会報に多くの寄稿が残されている。）

広島に村上君（昭三十九年卒）を訪ねる

名和 泰三

今回の小旅行にあたって計画立案してくれた

村上君に感謝し奥さんにもお世話になったこと

を感謝する。サポートしてくれた蛭川、本間、

長沢の三君にも同様である。

先日（六月一日）に吉沢一郎さんに針葉樹会

でお会いした折広島周辺の山の名前を即答なさ

れたのは、日本アルプスと東京周辺の山の名し

か知らない私にはさすがだなと思わせた。

学生の頃彼と長沢君が山行の報告をすると

『こんなコースは日数のかけすぎだ』と倉知さ

んに言われたと懐かしそうに話していた。

羽田から広島まで一時間十五分全く日本は狭

い。

五月二六日に原爆ドーム、資料館を訪ねた。

原爆ドームは土地の人は全く興味をしめさな

いが世界の人が来てスイッチボタンを押すと英

語、仏語、韓国語と自国語の説明文が出る。

よく出来ているなと感心した。

五月二十七日に宮島の弥山ロープウェイは一

つロープウェイの終点から又次のロープウェイ

の連続だった。こんな初めでだ。

概して広島のは奥多摩の山の様な優しい山

に感じた。

紅葉谷で鹿に道で出会った。

村上君が新聞紙をまるめ鹿に与えたが鹿は食

べなかった。

おもしろいことするなと思った。

五月二八日植物公園でカトレアの花を見る。

実際に咲いているカトレアを見たのも初めて

であった。今回の広島旅行といい、前回の香港

旅行といい針葉樹会の会員諸子に、深く感謝す

る。

秋季懇親山行報告

(奥多摩・川乗山)

兵藤 元史

昨年十月十六日に行いました。表記の山行を以下報告致します。参加者は、小林茂雄(昭二)、山崎擴(昭三)、伊藤恙生(昭三)、高崎治郎(昭三)、岡悦郎(昭三)、前神直樹(昭三)、引地真(昭五)、稲毛尚之(昭五)の各氏、引地君の奥さん及び小生(昭五)の計十人でした。



川 苔 山

当日、朝八時に奥多摩駅に集合した九人は(一名、遅刻した人がおりましたので)予定通りの日原行バスに乗り、川乗橋で下車しました。連休の翌週にもかかわらずバスはそれなりに混んでおり、同じ所で降りた人も数人いました。簡単な自己紹介の後、川乗谷林道を歩き始めて、竜王橋へ(九時)。沢登り組二名(小生と某君)と一般路組七名に分かれました。

ここから先は、あまり書きたくありません。逆川を溯行する予定であった二人は、山仕事の人達のつけた踏み跡にまどわされて、林道と川床を往復すること三度、結局目差す谷の合が分からず、一時間半遅れで一般路を辿ることになったのです。遅れて着いた山頂で先行した諸先輩に拍手で迎えられて、そのバツの悪さはこのうえもありませんでした。

ここ数年、海外駐在やら、なんやらで、山から離れた生活を送っておりました。昨年の春、代表幹事の西牟田さんから、代表幹事にならないかと打診があった際、山行幹事なら引き受けますとお答えしたのは、否が応でも山へ行かざるを得ない状況へ自らを置くつもりであったのです。七月に同じ奥多摩で沢を一本登り、万全とは言えないものの、準備怠りなく沢を楽しむはずだったのですが……。

先行組を追う我々の気持ちを表わすかのよう
に、霧雨が降りはじめ、黙々と山頂へ向う足は
重くなるばかりでした。

先着した(十二時二十分)七名と遅刻した一
名が、山頂での旨酒を酌み交わし、引地夫妻が

準備してくれた豚汁がまさに供されようとした時にドジな二人は山頂着(十三時十分)。雲が低く、気温も低い山頂でしたが、その分、温かい豚汁はヒットでした。

山崎先輩の夏の東北山行(車で山と温泉を楽しまれた由)、や退職後、毎週山へ行かれて週末は休まれておられる話をうらやましくうかがったり、次の懇親山行が話題になったり、山頂での時間はあっという間に過ぎました。

十四時に山頂を辞し、山の神経由、鳩ノ巣駅着、十六時四十分。「今日は歩き足りなかった」と山崎先輩が、車を預けておいた隣りの駅まで歩かれたのには、トレーニング不足の若手は頭が下がるばかりでした。山崎先輩のみならず、本山行では、小林先輩を始めとする老人(失礼)組の強さが印象的でした。

その晩は、川井駅近くの「松乃温泉、水香園」に、伊藤先輩、前神さんを除く八人が泊まって、奥多摩唯一(?)の温泉で汗を流しました。

小林、山崎両先輩から、戦時中の山行の様子などを聞かせて頂きました。この宿は、もう一人の山行幹事の加藤(急な出張で山行はキャンセル)が予約してくれたのですが、お陰様で楽しい一夜の宴が持てました。

さて、山行中も話題になった次の懇親山行ですが、春に山スキー、秋に徳沢という案が有力でした。しかし春の山スキーは幹事の怠慢で実施できそうもありません。(どうもすみません。)秋の三連休の徳沢はなんとか実現するつもりです。ので、乞う御期待。
(以上)

会務報告

一、平成六年度の新年会が、平成六年一月二十四日(月)に如水会館にて、次の二十六名方の参加を頂き行われました。(敬称略)

名和泰三(特別会員)

吉沢 一郎(S3)、同氏夫人

増山清太郎(S8)

佐野 茂雄(S16)

佐藤 政雄(S17)、森 一則(S17)

松下 順吉(S19)

樋口 洪(S22)

山崎 擴(S23)、石井左右平(S23)

上田 駿策(S26)

石原 脩(S30)

高崎 治郎(S31)

岡 悦郎(S32)、山本健一郎(S32)

岡垣 治雄(S33)

渡邊 嘉裕(S35)

中島 寛(S36)

倉知 敬(S38)

西務田伸一(S47)

加藤 博行(S51)

引地 真(S55)

石丸 義男(S60)

白石 章治(S61)

天羽 康之(H5)

二、会員計報(敬称略)

S6卒 金田吉兵衛 H4年6月 逝去

S7卒 吉沢松次郎 H5年9月 逝去

名誉会員 金田 近二 H5年10月 逝去

S6卒 手塚 晴雄 H6年1月 逝去

三、会員異動(敬称略)

坂井 溢弘 S41卒

〒二五九一〇二 神奈川県足柄下郡真鶴町岩

七五六一四

☎〇四六五―六八―五七八一

宮川 守久 S31卒(米国より帰国)

〒一六五 東京都中野区上鷺宮三―八―二二

マリンハイツ富士見台

F棟三〇六号

☎〇三一三九九九―九二九五

金子 晴彦 S46卒(ベルギーより帰国)

〒二四五 横浜市戸塚区鳥が丘五八―一九

☎〇四五―八六四―七四九七

神野 隆 S54卒(香港より帰国)

〒六五一―一二 神戸市北区日の峰

三一―四―四

☎〇七八―五八二―二二三五

米田 篤祐 S55卒(インドより帰国)

〒二七七 千葉県東葛飾郡沼南町

一二八五―五三

☎〇四七一―九一―〇三七七

天羽 康之 H5卒

〒二二一 川崎市中原区小杉町

二―二〇一―一―五〇七

☎〇四四―七二―一―三九四六

編集後記

東京にも数十年ぶりという大雪が降った今冬でしたが、皆様におかれましては如何だったでしょうか。

本号は前号で予告いたしました通り昨年お亡くなりになりました。近藤恒夫先輩の追悼特集といたしました。

次号は、今回掲載できなかった分も含めまして会員諸氏の山行を中心に編集したく思いますので皆様の投稿をおまちいたします。

